

揺れる沖縄

——戦争から占領、そしてシマクトゥバからオキナワン・ロックまで——

日時 2016年12月10日(土) 10:30-17:30 会場 神奈川大学横浜キャンパス3号館405講堂

趣旨説明 小熊 誠 (日本常民文化研究所・国際常民文化研究機構)

パネル報告

報告1 比嘉豊光 (写真家) 「島クトゥバで語る^{いくさゆ}戦世」

コメント: 後田多敦 (日本常民文化研究所)

報告2 川平成雄 (琉球大学法文学部元教授) 「占領直後の住民生活」

コメント: 安田常雄 (日本常民文化研究所)

報告3 ロバーソン・ジェームス (金沢星稜大学人文学部教授)

「オキナワン・ロックをめぐる沖縄・アメリカ・日本」

コメント: 泉水英計 (日本常民文化研究所)

総合討論 司会: 小熊 誠 後田多敦

庶民の暮らしから、沖縄の歴史総体をどうとらえるか

後田多 敦

第20回(2017年度)「常民文化研究講座・国際研究フォーラム」は沖縄をテーマとすることとなったが、神奈川大学日本常民文化研究所には沖縄をフィールドとする研究者は数人いるものの、現在は沖縄をテーマとした研究チームはない。そこで、沖縄の現在的な課題と人々の暮らしに基点を置く日本常民研究所のスタイルや将来の研究テーマなどを視野に入れつつ、国策に翻弄され続けた沖縄の歩みを庶民の暮らしからアプローチすることになった。

沖縄の民謡歌手・嘉手苺林昌(故人)が歌った「時代の流れ」の一節に「唐の世から大和の世 大和の世からアメリカ世 ひるまさ(*奇妙なくらい) 変わたるこの沖縄」がある。シンプルな表現ながら、揺れ続ける琉球・沖縄の歴史を「世の転換」による日常の変化までを巧みに歌い上げ、人々の共感を呼びよく知られている民謡だ。

島津氏による1609年の琉球国侵略、「琉球処分」とよばれた明治日本による1879年の沖縄県設置に到る琉球国併合過程、沖縄戦(1945年)からアメリカ占領、そして1972年の日本「復帰」と揺れ続ける琉球・沖縄。この歌詞で表現されるように、沖縄の庶民の生活は、日本政治の在り方に直接的に左右されてきた。一人ひとりの暮らしや環境が、足元から揺さぶられ、何度もリセットされてきた。まさに「揺(さぶら)れる沖縄」である。

沖縄の位置に対するこのような問題意識から、さらに対象とする時期を沖縄戦から米軍の占領、そしてその後とした。これらを踏まえ、フォーラムタイトルは「揺れる沖縄——戦争から占領、そしてシマクトゥバからオキナワン・ロックまで——」となった。戦争による破壊や社会制度の転換



写真1 講座風景

写真2 比嘉豊光氏／右

写真3 川平成雄氏

写真4 ロバーソン・ジェームス氏

の時代を沖縄の人々はどう生きたのか。フォーラムでは、戦争や言葉、暮らしと経済、占領と住民の対応とアイデンティティーなど、このテーマを考える上で重要な切り口で仕事をしている3人を招いた。

写真家の比嘉豊光氏は沖縄の祭祀などを記録しながら、1990年代後半から琉球弧を記録する会のメンバーとして沖縄戦体験をシマクトゥバ（母語）で語ってもらい、その映像を記録するという活動を続けている。既に1,000人を超える人々の証言を記録しているという。比嘉氏の仕事はいくつかの点で画期をなす。まずは、シマクトゥバで（を）記録していること。さらに、戦争体験の証言とシマクトゥバを結び付けている点だ。近代沖縄は日本に組み込まれる中で、言葉を奪われ、あるいは「標準語」を強制された。そして、沖縄戦の最中には、「爾今軍人軍属ヲ間ハズ標準語以外ノ使用ヲ禁ズ、沖縄語ヲ以テ談話シアル者ハ間諜トミナシ処分ス」という命令も出された。人々が味わった地上戦の悲惨さや恐怖がその人々のシマクトゥバで記録される。

フォーラムは、比嘉が記録したシマクトゥバによる沖縄戦の証言が上映された。報告で比嘉氏は、著名な写真家（故人）が沖縄を撮った写真の新編が刊行された際の事例を取り上げ、沖縄の現在の文化状況に触れ、調査・撮影する側の倫理や方法についても問題提起を行った。

ロバーソン・ジェームス氏は〈「オキナワン・ロック」をめぐる沖縄・アメリカ・日本〉のテーマで報告し、占領下の嘉手納基地ゲート前の街・コザで生まれ発展したオキナワン・ロックを通して、占領にともなう文化接触などを、その背景や事例を通して説明した。ロバーソン氏は、占領が政治的・軍事的な暴力による支配でありながら、一方ではアメリカと沖縄の文化の接触する空間・関係も作り出し、そのなかでオキナワン・ロックという新しい音楽文化が生まれ、育まれていったという。そこには、地域や個人のアイデンティティーの問題があり、復帰後も日本化やリゾート開

写真5 「摩文仁・6・23」(写真5~10/比嘉豊光氏撮影)

発、米軍基地支援などといった日本政府の政策と、絡み合っていることを示した。ロバーソン氏は、支配と暴力、文化の受容や同化と異化のせめぎ合いが常態化するなかでたくましく生きた人々と社会をとらえようとする。

「占領直後の住民生活」のテーマで発表した川平成雄氏は、証言や記録を分析しながら占領期の社会や人々の暮らしを具体的に描き出す研究成果を多く生み出してき

た。人々の暮らしは国家システムと直結し、庶民の暮らしの実態は国家の政治や経済システムと合わせてとらえなければ把握できない。それがまた沖縄の人々の暮らしの実態でもあった。川平氏は、収容所や占領期の住民の暮らしや復興への取り組み、米軍の強制的土地接収による基地建設、通貨交換、毒ガス貯蔵発覚などの占領期の問題を歴史、社会経済史の中に位置づけた。

写真6 「コザ」

フォーラムで川平氏は、沖縄の歌・三線や踊りなどが廃墟や収容所などでの暮らす人々の悲しみを慰め、精神を支えたことなどを紹介。泡盛の復興など、戦争による破壊と占領下を必死に生き抜く人々を説明した。

日本常民文化研究所のメンバーからは、小熊誠氏が総合司会、後田多敦は比嘉氏のシマクトゥバによる証言記録の歴史的意味などについてコメント。泉水英計氏がロバーソン氏の報告と関連して、米軍占領下の衛生政策などについて資料を挙げて説明した。安田常雄氏は川平氏の報告に「本土」の戦

写真7 「バックナー記念碑近く」

後との関連も含めてコメント。安田氏は庶民生活や文化を再構成してとらえる必要性を説明しながら、戦後沖縄の庶民生活の実態を描きだしている川平氏の社会経済史という手法の現在的な意義を強調した。また、いまなお、地域の潜勢力として生きている力を、生活をベースにどうとらえなおすか、などの課題を提示した。

会場からは、言葉や基地、独立をめぐる現在の議論などの質問が出され、感想では「沖縄は『揺れている』ではなく、『揺らされている』のだ」といった指摘、「言語についても新たな視点を得ることができた。音楽と政治のかかわりも興味深かった」「資料・映像・音楽も参考になった。これ

まで十分に議論されているとはいえない時代の分析のモデルとして、今後も講座でお示ししてほしい」など、内容だけでなく、報告者のアプローチ、資料などへの関心も示された。

社会の枠組みを破壊され、揺さぶられた沖縄。廢墟のなかで社会の原初的なところから、たくましく復興していった沖縄。政治的権利や通貨、社会制度から排除された沖縄。支配や同化とせめぎ合い、あるいは折り合いをつける沖縄。見る角度によって沖縄はさまざまな姿がある。そして、沖縄を対象とした研究は多く、戦後を扱った研究成果も多く蓄積されるようになった。しかも、比嘉氏がフォーラムで指摘したように、そのそれぞれの局面で問題が進行形でもある。

そのなかで今回のフォーラムは、庶民の生活をベースにしながらか、言葉や音楽、文化や社会などを通して沖縄の戦争・占領とその後の時代を対象とした点で、今後の沖縄研究へ切り口を提示したとあっていい。沖縄の歴史的体験をどう位置付けていくのか。それは、安田氏がコメントや議論のなかで指摘していたように、政治や思想という文脈だけではなく、社会や文化という人間の関係から実態を浮かび上がらせることでもある。そして、「揺さぶられてきた沖縄」の庶民の暮らしを知るには、制度や政治などの「本土」との対

比と位置づけが不可欠である。沖縄の歴史的体験を総体として生活のレベルから汲み上げ制度や政治を踏まえてとらえていくことは、沖縄研究にとって重要な意味を持っている。フォーラムはそのことをあらためて確認する場となったとあっていいだろう。

写真8 コザ騒動の現場（1970年、コザ市）

写真9 掘りだされた日本兵の骨（浦添市）

写真10 辺野古・2017年